

お だ たか ひさ
小田貴久

令和7年第1回定例会
県議会・一般質問報告



相 模原市では2034年以降のリニア開業に向けて、JRリニア中央新幹線の神奈川県駅の工事が着々と進められている。まちづくりの主体は相模原市であるが、JR橋本駅南口は県有地もあり、県としても相模原市等と連携し、神奈川県駅周辺を魅力あふれる場所にしていくことが求められている。その点で、知事からは、産業振興の観点から、ロボット企業交流拠点である「ファンタステックラボ」を活用して、ロボットの実用化と社会実装を加速させるとともに、JAXA相模原や県内の宇宙関連企業の強みを活かした、宇宙関連産業のクラスターの形成を進める意向が示されている。知事が旗振り役となり、ブランディングや広報、企業への具体的な支援策等を打ち出していくことで、県民の理解促進や機運醸成を図っていく必要がある。そこで、リニア神奈川県駅を「降りたくなる駅」にするため、今後どのような産業振興施策を進めていくのか、知事に所見を伺う。

知事答弁

神奈川県駅を「降りたくなる駅」にしていくには、駅周辺をビジネス目的で訪れる方々を含めて、何度も来てみたいと感じてもらえるような、魅力あるまちにしていくことが必要。そこで、「ファンタス

テックラボ」を活用し、さがみロボット産業特区の取組を加速させ、実用化を促進させるとともに、最先端ロボット開発に向けた新たな発想が生まれるようなまちを目指していく。また、神奈川県駅の近くには、JAXA相模原があるが、ロボット産業と宇宙関連産業とは親和性があることに加え、県内にはすでに多くの宇宙関連企業が立地している。この強みを生かして、来年度、宇宙関連企業等と、新たに宇宙産業に参入しようとする県内企業が共創を図るための拠点を整備し、宇宙関連の企業や研究機関なども集積させていきたい。今後、相模原市や関係機関等と連携しながら、神奈川県駅を降りた瞬間から、ロボットの活躍や宇宙での生活などに触れて、「ワクワクする未来を実感できるような「ロボットと宇宙のまち」にしていく。広報については、県では、これまでも、「ファンタステックラボ」において、地域住民向けのイベントを開催してきたが、今後、地元で開催されるイベントとの連携なども検討していきたい。また、ロボットや宇宙を身近に感じるマスコットキャラクターを活用した広報により、認知度の向上を図っていく。

要望

きっとこの議場にいる誰よりも私が、リニア神奈川県駅に一番近いところに住んでいる。さがみロボット産業特区の取組については、残念ながら駅周辺の住民に広く認知されているとは言えない。「降りたくなる駅」は、地域からすると、特に商店街や企業から見れば、多くの方々に「降りてもらふ駅」となるわけだが、その意識醸成が始まっているとは言い難い。ロボット、宇宙といったコンテンツを用いたイベントは、県や相模原市、JR東海、近隣の商業施設や企業など、それぞれが取り組んでいる感があるため、より一層有機的に結びついた取組を求める。

リニア神奈川県駅を「降りたくなる駅」にするための産業振興施策について



リニア中央新幹線「神奈川県駅(仮称)」新設工事現場 (令和6年11月9日撮影) 提供：産業労働局